

国際社会学部

社会学

sociology



沖縄島を包囲する米軍艦船（1945.3.29）

どのような学問か

『資本論』等で知られるカール・マルクス（1818－1883）は、「新しい現実をつくるには、もっとも搾取されている労働者たちがどのような苦境に直面しているのか、そこから思考しなければならない。現存する労働現場での闘争や生産様式から新しい世界の種子をみつけなければいけない」と説いた。

変革をおこなうのは現実の人間たちであり、だからこそ、この現実の人間たちが生活し、労働する現実的諸関係を分析することが変革にとって決定的な意味をもつ。そしてそのためには、「なぜ、いかにして疎外が生じているのか」を現実の諸関係から明らかにし、世界が現にあるような形態で存在するのかを問うていかなければならない。

社会を理解するための事実理解の方法として「社会学」を学問として打ち立てようとしたデュルケームに対して、労働者／プロレタリアの解放・革命が必要であると考えたのがマルクスであったが、彼が提起した「囲い込み／エンクロージャー」の問題に焦点を当てつつ、社会進化論、帝国主義、奴隷制、ヘゲモニーとプロパガンダ、知と権力、再生産の問題を論じた社会学者たちの古典から学ぶのが「社会学原論」の授業である。資本による生産手段と労働力の収奪を伴う、資本主義社会の成立における生産様式の変化の過程としての「本源的蓄積primitive accumulation」はどのような問題として歴史に、そして私たちが生きる現在に現れているのか。共有地を奪われた人々は賃金労働者となり、「疎外／alienation」を経験する。しかも、囲い込みは一度で終わらず、土地収奪と労働力化は繰り返されてきた。そうした中で、本源的蓄積に伴う暴力や無報酬労働に対して奴隷や女性、動物を含む様々な主体は抵抗を繰り返してきた。

「現代社会論」では、「囲い込み」の重要な契機としての「戦争」と「占領」について議論する。とりわけ第二次世界大戦後、平時から軍事基地を駐留させる、あるいは基地を設置する」発想のもとで世界各地の土地を囲い込み軍事化してきた米国という帝國的主体による「植民地なき帝国主義」の分析を行う。第二次世界大戦後の日本における戦後復興／開発が日米安保体制をいかに支え、体制に抗う人々の動きはいかに犯罪化されてきたのか。

「人種的資本主義」の近代世界システムの問題として奴隷制、帝国主義、集団虐殺の暴力を考えていく。

おススメの本

- 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志編著『社会学 新版』（有斐閣、2019年）
- シドニー・W・ミンツ著（川北稔訳）『甘さと権力—砂糖が語る近代史』（筑摩書房、2021[1985]年）
- C・ライト・ミルズ『社会学的想像力』（筑摩書房、2017[1959]年）
- 林博史『暴力と差別としての米軍基地』かもがわ出版、2014年
- 謝花直美『戦後沖縄と復興の「異音」—米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望』（有志舎、2021）
- マリア・ミース（奥田暁子訳）『国際分業と女性—進行する主婦化』日本経済評論社、1997[1986]年
- イヴァン・イリイチ（玉野井芳郎・栗原彬訳）『シャドウ・ワーカー—生活のあり方を問う』岩波書店、2006[1970]年

外大の社会学

関連する授業一覧（2023年度）

- 上原こずえ「社会学原論」「現代社会論」「質的社会調査法」
- 田邊佳美「国際社会学」「移民と国家の社会学」
- 坂上香「ドキュメンタリー映画論」
- 柏崎正憲「市民権/国籍の政治社会学」
- 徳永理彩「Gender and Globalization」
- マニュエル・ヤン「Genocide, War and Imperialism」
- 高橋均「教育社会学」
- 末富均「教育の社会学」

ゼミ

- 上原こずえ（社会学）
- 田邊佳美（国際社会学）
- 加藤美帆（教育社会学）

関連する学問分野

- 社会調査法
- 国際社会学
- 教育社会学